

“Young Goodman Brown”に見る意識と現実

— The Conscience and Reality in “Young Goodman Brown”: Phases Where You Wake Up —

大井映史

要旨

本論は、Nathaniel Hawthorne の “Young Goodman Brown” (1835) を中心に、アメリカ文学が人間の意識とリアリティの問題をどのように描き、どう展開させて来たかを確認しようとするものである。

一夜の夢体験によって若い Goodman Brown は信仰を失う。悪夢の迫真性が日常生活に影響を及ぼし、彼は人間不信に陥るのである。悪夢の中に覚醒する意識は、現実的な意識とは次元を異にするようであり、表裏的に、社会的な意識が容易に忘れ去って気にかけることのない夢体験を記憶し蓄積する、もう一つの主体なのだ。

17世紀ピューリタン社会は信仰を求めながら疑いを捨てきれない Brown を救い得ない。しかし、Hawthorne は Brown に19世紀的な感覚を付与することで、救いというもの、人がどんな時代・社会に目を覚ますかによって決定されるものであることを暗示する。

現代アメリカ作家の多くが夢体験を描き、意識と現実の問題に取り組んで、人がどんな朝に覚醒し得るかを問うている。

キーワード：意識、衝動、幻想、錯覚、悪夢、リアリティ、信仰、迷宮、墮落、清教主義、覚醒

“Young Goodman Brown” (1835) は信仰の喪失を描く物語である。たった一夜の体験が、若い Goodman Brown には自明だったはずの信仰を突き崩す。それが夢か現か定かならず、善悪の境界に疑問が生じれば、何が正しく何が間違っているのか、Brown の意識に秩序を回復する術がない。悪夢の内に持たれる意識は、圧倒的な混沌

の渦に巻かれて立ちすくむのみである。しかし、その意識は、現実には覚醒して持たれる意識とはまったく次元を異にするようであり、表裏的に、日常的な意識が容易に忘れ去って気にかけることのない夢のような経験を積み重ねるもう一つの主体なのだ。夢と現実の狭間で引き裂かれる Brown の主体性は、己を支えることができない「意識」という迷宮を彷徨うことになる。

Brown は森で目を覚まし、セイレムの街に戻って来る。しかし一夜明けて、彼はすでに以前とはまったく異なる現実意識を抱いている。かつて信仰とともに生きることを決めた良夫、Goodman Brown は、新妻 Faith のもとに戻っても、一夜の夢のような体験を夢として退けることができない。それを真実だと認めるのも本意ではない。自らの目が見たと思われるものを、疑いながら否定せず、同時に、意識的に嫌悪する。アイデンティティと言われるものに亀裂が走り、時間的・空間的な連続性に揺らぎが生じるのである。信じるべきものを見失えば、確かなものは何もない。この世に生きる価値も、意味も見出せない。移ろい行く現実にはリアリティはない。意識は錯覚にすぎない。¹⁾ Goodman Brown の意識には、すでに自らの行動を司る選択権が持てないのである。彼は陰気な死を迎えることになる。“... they carved no hopeful verse upon his tombstone; for his dying hour was gloom.”²⁾ という締めくくりは、死んで天国に召されることにも希望が持てないことを示唆するものである。Goodman Brown の墮落は決定的なのだ。

本論は、Nathaniel Hawthorne の “Young Goodman Brown” を中心に据えて、アメリカ文学が人間の意識とリアリティの問題をどのように描き、どう展開させて来たかを確認しようとするものである。

この物語の結末で、Hawthorne は直接読者に向かい、こう語りかける。“Had Goodman Brown fallen asleep in the forest, and only dreamed a wild dream of a witch-meeting? Be it so, if you will.” (89) この口調は、Brown が17世紀的には悪魔の潜む森に自ら足を踏み入れて、恐ろしい夢を見ただけのこととしては済まされないものがあるという含みを残し、読者を突き放そうとするものだ。すでに読者は虚構の世界を追われているのだが、改めて “Young Goodman Brown” という物語の寓意に向かい合うのである。William Empson の言葉を借りれば、寓意には多くの解釈の層があると感じさせる曖昧例がここにある。夢か現か、それだけではなく、表裏的な状況に関する様々な推量を読者に許容して、“verbal subtlety” を意識させる Hawthorne 的な創作の技法を見ることができる。曖昧性または両義的な含意は、Agnes Donohue を始め多くの批評が一致して Hawthorne 文学の核心⁴⁾だとするが、その効果は、それを夢だと明言する現実性を作者が拒否する時に、Brown が見たと信じ、読者の体験ともなる一夜の出来事を、Brown の現実には優るリアリティとして提示することを可能にする。人間とは意

識的な存在である以上に感覚的な存在なのだ。Hawthorne は別人となって帰って来た Brown のその後を語って物語を閉じようとするが、逆説的には、一夜の体験を経て、Goodman Brown が以前とはまったく異なる現実に目覚めたのだと解釈することも可能なのだ。ならば、Brown には他にどんな世界に目覚める可能性があったのか、あるいは、そんな可能性はなかったのか、読者が主人公の内部感覚⁵⁾を共有しようとする者であるなら、問題は Brown の墮落という憂鬱な結果ではなく、彼を信仰に目覚めさせようとはしない夢と現のインパクトであることが明らかだ。意識という幻想が司る主体を揺るがし、己を無意識に支えるものは、知覚の扉の奥に蓄えられた夢の記憶なのだ。

夢をキーワードに Hawthorne 文学を読み解く Rita K. Gollin は、“My Kinsman, Major Molineux” (1832) の主人公 Robin が彷徨い込む18世紀のボストンを Goodman Brown が足を踏み入れる森に重ね、“He [Robin] is on a quest, and the town is as much a symbolic equivalent of his inner labyrinth as the forest in ‘Young Goodman Brown.’”⁶⁾と指摘する。確かに、Hawthorne の主人公たちは内面的な迷宮に迷い込む。その迷宮は良かれ悪しかれ「夢のような」体験が待ち受ける世界である。しかし、Hawthorne は夢の再現を試みたというより、あるいは夢の真実を追究したというよりも、Gollin が言及する Simon O. Lesser が *Fiction and the Unconscious* (Boston: Beacon Press, 1957) で言っている通り、想像力豊かな心に結ばれながらも実体なく、束の間で潰れ去る空想、もしくは夢が見せるものに形と実体を与えようとしたのだと言うべきである。意識が覚醒を意味するわけではなく、無意識が睡眠を意味するわけでもない。夢の意識は無ではなく、夢は眠れる意識の体験⁷⁾である。Hawthorne が描こうとするのは「人の心の真実」⁸⁾であり、そのリアリティなのだ。

物語は結婚したばかりの若い夫、Brown が敷居を跨いで村の通りに足を踏み出し、振り返って新妻の Faith と別れのキスを交わそうとする場面から始まる。彼女も戸口から頭を出している。風が帽子のピンクのリボンに戯れる。Faith は一夜の旅に出ようとする夫を引き止めようとする。二人のやり取りが次の引用である。

‘Dearest heart,’ whispered she, softly and rather sadly, when her lips were close to his ear, ‘pr’y thee, put off your journey until sunrise, and sleep in your own bed to-night. A lone woman is troubled with such dreams and such thoughts, that she’s afraid of herself, sometimes. Pray, tarry with me this night, dear husband, of all nights in the year!’

‘My love and my Faith,’ replied young Goodman Brown, ‘of all nights in the year, this one night must I tarry away from thee. My journey, as thou callest it, forth and back again, must needs be done ’twixt now and sunrise. What, my

sweet, pretty wife, dost thou doubt me already, and we but three months married!’ (74)

一人きりだと女は様々な夢や思いに悩まされ、時には自分が恐ろしくなることがあるのだと Faith が言う。夫の耳元に唇を寄せて、一年のうちでも今夜だけは自分のベッドで過ごして欲しいと、そっと悲しげに、曰くありげに囁くのだ。新妻らしく帽子につけた明るいピンク色のリボンとは対照的に、Faith の不安げに媚を売るような物言いは暗示的である。Brown の返答は決然としたものではある。が、一年のうちでも今夜だけは Faith と離れて過ごさなければならない、その理由が明かされることはない。「行ったり来たりを繰り返すばかりの旅は、どうしても朝が明けるまでに行う必要があるのだ」と Brown は言う。その言葉は予言的だが、Faith が一人きりで取り残される不安の核心を打ち明けられずにいるように、Faith に背を向けて対極にあるものに向かう要請を意識しながら、その必然性については、Brown にも確かなことは何も言えないのだ。そんな決断が、果たして Brown 自身のものだと言えるのかどうか。Brown は後ろめたい思いを権威的な物言いで意識から締め出そうとする。いわゆる「禁圧⁹⁾」を行うのだ。Brown は結婚三ヶ月の妻 Faith を、象徴的には信仰を離れようとする。一年のうちでも特別な夜、Brown はどんな誘惑に己の信仰を賭すのか。二人の会話には、それぞれに不穏な心の動きが見え隠れする。目を覚まそうとしながら眠りに誘われる意識がそうであるように、夢と現、正気と狂気、あるいは神と悪魔と、Young Goodman Brown は、内的宇宙の両極の間を彷徨う人の心を体現する主人公だと言えるだろう。

自分が怖くなる夢の話をする Faith の物憂げな表情を思い出して、Goodman Brown は自らがどんな邪悪な目的のために Faith を残して来たかを反省する。良心の呵責を感じるのである。その延長線上で、Brown は Faith の言葉に警告を感じ取るが、‘... But, no, no! ’twould kill her to think it...’ (75) と、自らが行おうとしている悪事が、それを思うだけでも Faith には致命的だと動揺するのだ。ユグヤ教が禁止的な物言いで行いを説く一方、キリスト教は心の持ちようを語る。してはならないことは、したいという衝動を持つだけでも非とされる。実際にしなくても思うだけで罪なのだ。衝動が意識に上るとは限らないのだけれども。Brown は己の胸中に潜む蛇¹⁰⁾ の存在を無意識に感じながら、Faith のためという建前で、むしろ己の目に真実を隠蔽するのだ。Faith の夢の話の思い出すことは Brown の自分自身に対する警告だが、彼は意識的に内部感覚を遮断する。意識が自認する善良であるはずの「私」に背く、別の「自分」¹¹⁾ を認めれば、行為の選択には常に疑義が差し挟まれることになる。己の罪深さを思っても、意識による制御には限界があるのだ。Brown が意識的に、‘... Well; she’s a blessed angel on earth; and after this one night, I’ll cling her skirts and follow her to Heaven.’

(75) と心に決めて己を欺く様は、まさにペテンである。Brown は Faith を侮っている。意識は、自分と自分の持ち主を同一視したが、無意識に衝き動かされることを良しとしない、無意識は意識されないために、意識がその存在を認めがたがるのである。¹²⁾

Brown が森で出会う男を、作者は “the figure of a man, in grave and decent attire” (75) だと紹介する。権威を身につける者の影が切り株から立ち上がる。その男の実在性は保留されていると言っていい。男は Brown に肩を並べ、歩調を揃える。その外見は Brown に似ており、Brown の意識が父親だと認めるわけではないけれども、まるで父と子のように見える。Brown と父親の姿を取る者とのやり取りを引用する。

‘You are late, Goodman Brown,’ said he. ‘The clock of the Old South was striking as I came through Boston; and that is full fifteen minutes ago.’

‘Faith kept me back awhile,’ replied the young man, with a tremor in his voice, caused by the sudden appearance of his companion, though not wholly unexpected. (75-76)

Goodman Brown は「遅いじゃないか」とたしなめられる。わずか15分でボストンから森に駆けつけたと言う男は、自らの正体を隠そうとはしない。Brown は男が何者かを確認しようとしなない。意識が知りたがらなくても、それが何者かは無意識に分かる。予め示し合わせた会合なのだ。それでも、旅の道連れとなる男の出現があまりに突然で、Brown は声を震わせ、「Faith がぼくを引き止めたのだ」と弁解する。Brown の言葉は象徴的だが、彼は自ら発した言葉の意味に気づかない。Faith のほかに Brown を引き止め得るものなどないというのに。Brown の声の震えは、Faith を試すようなことを¹³⁾している、己の後ろめたさを表すだけではない。いかめしい高貴な装いに身を包む者の圧倒的な権威の前に、社会的な意識が為す術なく従うことを選ぶ心理的な状況を示唆もする。森に踏み入れれば ‘There may be a devilish Indian behind every tree.’ (75) と不安がる Brown が、予期しなかったわけではない、まさに悪魔との会合の実現に震え戦く姿は Brown の実存を明かすものだ。それが夢であれ現実であれ、彼が初めての恐怖体験に臨んでいることは確かなのだが、その事実にも、Brown の意識は無頓着だ。イニシエーションの物語という観点から見れば、いずれ大人になろうとする者は誰もが、勇者も踏むを恐れる森に一度は足を踏み入れて、無事に帰還することが、人間に課せられた契約の一つであり宿命だと言えなくもない。しかし、無意識に急を知らせる警報が鳴り響いても、恐怖に立ち竦む意識が信仰に背く可能性は高い。追いつめられれば、「私」という社会的な意識は行為の主権を無意識に機能する「自分」に譲り渡したがる。

さらに森の奥へと道を行くことを急かされて、Brown は歩を止める。彼は連れの男

に‘Friend’と呼びかけ、森で男に会ったことで契約を、“covenant”を果たしたのだから、次に為すべきは来たところ、Faithのもとに帰ることだと言い放つ。なるほど、契約とは本来、神との間にあるべきものだ。Faithのもとに帰りたいなら、帰らなければ。しかし、未だ幼く信義に篤い Goodman Brown は、“I have scruples, touching the matter thou wot’st of.” (76) などと、悪魔の知識に不信を呈して反論を試みるのだ。Brown が悪魔の知識という誘惑に惹かれて来たことが推察されるくだけりだが、もちろん彼は悪魔を知らない。議論を始めてしまえば、Brown が道を取って返す機会もない。悪魔の権威に挑んで行われる Brown の発言は大胆で無邪気な正論だが、‘Sayest thou so? ... Let us walk on, nevertheless, reasoning as we go, and if I convince thee not, thou shalt turn back...’ (76) と、意味ありげに諭されれば、法廷に引きずり出されたにも等しい Brown の臆病な意識に反論の言葉がない。Goodman の無意識が、‘We are but a little way in the forest, yet.’ という言葉に反応し、‘Too far! too far!’ と悲鳴を上げて、Brown の意識は、すでに主体性を放棄している。無意識ではなく意識こそ、悪魔が容易に支配するところなのだ。

恐怖やためらいに足を止める瞬間には、それが夢だと思えば目を覚ませと叫ぶ機会も与えられている。叫びが、夢を見る主体をどこへ運び、どんな世界に目覚めさせるのかは別にしてもだ。¹⁴⁾

悪魔との議論は Brown をさらに闇の奥へと引きずり込んで行く。Brown が言葉を探し出す前に、Brown の主張に対する反論が相手から示されるというより Brown の胸の内に生まれ出る。また、Brown は顔見知りの善良な村の人々が、夜の闇を縫って森に集まって来る気配を感じ取る。ある者は名指して悪魔に語りかける。果たして、村で親しんでいる人々が実際に夜の森に足を運んでいるのかどうか、定かには見極めることができないのだけれども、Brown は ‘That old woman taught me my catechism!’ (80) と、嘆息しもする。そこにあるのは、悪魔が操る悪意に満ちた妄想の世界だと言える。

Goodman Brown は揺るぎない世界という前提から出発して、それが誤りであることを発見し証明する主人公である。¹⁵⁾ 彼の世界観が覆されていく過程は、彼が再び意を決して歩を止め、今は “his acquaintance” と呼ばれる男が「しばらく休んでよく考えろ」と言い、内から腐る楓の杖¹⁶⁾を残して消え去ったと思った時に始まっている。Brown は、定かには見極められないのだが、牧師と執事の声を聞きつけたと想う。いわば悪夢の中に覚醒し、Brown は他のだれにも増して信ずべきキリスト者に裏切られていたのだと「悟る」。彼は支えを求めて木に掴みかかり、ひどい吐き気に眩暈して耐え難く、地に崩折れようとする。Brown は自らも森に足を踏み入れていることを、また、彼自身が魔女集会に参加しようとして来たことを忘れていたのである。彼は真実だと思われるものに愕然とし、天を仰ぐ。星が瞬いている。勇ましくも Brown は自らに言い聞かせる。

“With Heaven above, and Faith below, I will yet stand firm against the devil!” (82) Goodman Brown が両手を挙げて祈りを捧げようとする瞬間、しかし、彼が目にするのは輝く星々をかき消して天頂を横切る一塊の暗雲だ。夢か現か、北へ向かう雲から、混乱した怪しげな声が漏れ聞こえて来る。男と女、敬虔な者と邪悪な者、聖体拝領に集まる者と居酒屋で騒ぐ無礼者ら、村で出会う様々な人々の入り混じる声を、Brown は耳にしたと想うのだ。しかし確かではない。耳を澄ませば夜の森のざわめきがあるだけだ。が、次の瞬間には、再び人の群れが発する異様な声が高まる。若い Brown の意識にとっては不幸なことに、善悪の明確な境界線が崩れ去ろうとしているのである。清教徒の社会で善良であろうとする Goodman Brown の意識には、清き者が穢れた者と同列にあること自体、許し難いことだ。Brown は夢を見ているに過ぎないのだろうか。あるいは、それが現実なのか。ならば、日常的な意識が司る現実こそ、まやかしののだ。

街の人々を運ぶ雲の中に、Brown は Faith の悲鳴を聞いたと想う。“all the unseen multitude, both saints and sinner” に取り囲まれて、Faith は魔女集会へと連れ去られるのだと想う。

‘Faith!’ shouted Goodman Brown, in a voice of agony and desperation; and the echoes of the forest mocked him, crying — ‘Faith! Faith!’ as if bewildered wretches were seeking her, all through the wilderness.

The cry of grief, rage, and terror, was yet piercing the night, when the unhappy husband held his breath for a response. There was a scream, drowned immediately in a louder murmur of voices, fading into far-off laughter, as the dark cloud swept away, leaving the clear and silent sky above Goodman Brown. But something fluttered lightly down through the air, and caught on the branch of a tree. The young man seized it, and beheld a pink ribbon. (82-83)

Brown の苦悶に満ちた絶望感は、悪魔に従う村中の者が、共謀して Faith を奪い去ったのだと信じるところに生じるものだ。彼は Faith が、信仰が失われた可能性を疑って、動揺する。その時、Brown は自らの信仰の揺らぎには気づかない。Faith を求めて無意識に Brown は叫ぶ。その叫びは意味もなく森に木霊するばかりだ。Hawthorne は実に巧みに読者の心理に Brown の信仰喪失の可能性を示唆しはする。が、Brown は本当に Faith を取られ、信仰を失ったのだろうか。彼は息を呑んで返答を待つ。暗雲から聞き分けられたと思われる Faith の叫びと人々のざわめきは過ぎ去り、頭上に晴れた静かな空が広がる。すると、何かが空から舞い落ちて来る。Brown の絶望を決定づけるのは、舞い落ちて木の枝に止まるピンクのリボンだ。このリアリティは、夢と現の不確

かな境界に迷い込む者の意識には決して夢ではあり得ない。悪夢が現実となる瞬間なのだ。彼は Faith のリボンを掴み取り、それを手の内に見て叫ぶ、‘My Faith is gone!’ . . . ‘There is no good on earth; and sin is but a name. Come, devil! for to thee is this world given.’ (83) この認識は、なるほど Brown をさらに狂気へと陥れて当然だし、社会に組み込まれて生きる者を震え上がらせるインパクトを持っている。悪魔的な迷妄の世界の真っ只中であって、Brown が掴み取る Faith のピンクのリボンだけはあまりにもリアルだ。しかし、Brown の叫びが、“My Faith” が悪魔に奪取されたと思う妄想から発するものであることもまた確かである。その可能性がないとは言えないにしても、この世に善がなく、罪とは名ばかりのもので、世界が悪魔のものだと結論づけることは、それこそ悪魔の思う壺なのだ。事実は、Brown の信仰が危機に瀕しているということであって、その一大事に、Brown は理性的な意識を堅持できず、無意識に、錯乱状態に陥るのだと言える。Brown の行動を振り返れば、彼が天使とも思う妻を取られて少しも不思議がないことを、意識下では、彼が一番よく知っているからである。己の善良であることを信じて疑うことのない若さは、彼の愚直と表裏をなすものだ。が、現実的にも事の善悪は判断し難く、その境界は定かではない。それでも人は常に二者択一¹⁷⁾を迫られ、頼りない決断に運命を委ねる。それが現実に日々を送る者の知る真実だ。Goodman Brown が愚かだというなら、人間こそ愚かしいと言うべきだ。

絶望感に駆り立てられて、Brown は悪魔そのものとなったように森を抜け、魔女集会に現れる。松明に彩られた真夜中の森の空き地にはすでに会衆が集まっている。揺れる炎は数知れぬ人々の顔を赤く照らし出しては影に閉ざすことを繰り返している。集まっているのは、異教の祭司や占い師の他は顔見知りばかりだ。昼の光とは対照的な、炎と闇が交錯する魔界がリアルに描かれる。“A grave and dark-clad company!” (85) と Brown は呟く。彼は清教徒たちを指して言っているのである。彼は清教主義に忠実な生徒ではないのかもしれない。Brown は Faith を探そうとする。が、心に希望が差そうとする時、彼は震えを禁じえない。こんなところで Faith と顔を合わせたくはないと思うからだ。崖の上の炎が閃光を放ち、改宗者が呼び出される。その言葉に、Brown はほとんど無意識に反応する。会衆に近づくと、彼は “a loathful brotherhood” を感じないわけにはいかない。無意識に、心に潜む邪悪な思いのすべてが共鳴するのである。彼は忌むべき絆を押しつけられているのだ。その時、Brown は死んだ父親の姿が手招きをしたと確信し、また、絶望的な表情を湛える母の姿が、戻れと警告を発しながら手を差し伸べようとしたとも確信する。が、Brown には一步を踏み出す力もなければ、一步退いて抵抗するなど思いもよらない。Brown は執事に抱えられて引きずり出される。Goody Cloyse と Martha Carrier に伴われ、同じように、ヴェイルを纏う瘦せた女が連れて来られる。Goody Cloyse は Brown に教義問答を教える女性であり、

Martha Carrier はセイレムの魔女裁判で魔女として処刑された人物である。ここでも Hawthorne は執拗に善悪の相対的な構図を描き出し、その狭間にヒロインを置くのである。

闇の姿をとって現れる悪魔の説教は次のように始まる。

‘Welcome, my children,’ said the dark figure, ‘to the communion of your race! Ye have found, thus young, your nature and your destiny. My children, look behind you!’ (86)

闇が説くのは人間の本性と運命についてだ。人間がいかに悪に染まった穢れた存在であるかを訴える。闇は若い二人に後を振り返れと命じる。ここに集まる会衆のすべてが、その生きた証拠だと言うのである。見かけがどんなに立派な聖者だろうと、人の心の奥には悪が棲みついている。それが人間の本性であり、悪に生きることこそが人間の運命だと説く。悪は互いに共鳴し、互いの心の奥底を見抜いて拡がり、蔓延っている。その例を、延々と連ねてから再び闇が二人に命じる、‘And now, my children, look upon each other.’ (87) と。そして、闇は自らの主張の正しさを決定的な方法で証明しようとするのだ。Brown と Faith は、魔女集会の不浄な祭壇で、互いに顔を見合わせることになるのである。闇は続ける、

‘Depending upon one another’s hearts, ye had still hoped, that virtue were not all a dream. Now are ye undeceived! Evil is the nature of mankind. Evil must be your only happiness. Welcome, again, my children, to the communion of your race!’ (88)

互いの心を頼りにして、美德は決して夢に過ぎないものではないと、なおも希望を抱いていたとしても、今こそ目を覚ませと。悪より外には人間の幸福などないと言い、そして、闇は、二人の仲間入りを歓迎しようと言うのである。

その時である、Brown が叫ぶのだ。‘Faith! Faith!’ cried the husband. ‘Look up to Heaven, and resist the Wicked One!’ (88) Brown は ‘Faith!’ と七回叫んで、ようやく悪夢から解放されるのである。Faith が Brown の言葉に従ったかどうかは分からない。Brown は人気のない静かな夜の中に目覚め、風の轟を耳にしている。よろめいて岩に寄りかかり、その湿った冷たさに触れる。火が点されていた垂れ下がった枝が、冷たい露を Brown の頬に撒き散らしている。Joan Elizabeth Easterly は冷たい露の雫が Brown を夢幻の世界から目覚めさせるとし、さらに、Brown が涙を流しはしないこ

とを表すために、作者が Brown の頬に露の雫を落としているのだと解釈する。¹⁸⁾なるほど Brown は泣くべきなのかもしれない、あるいは、心の内で泣いているのだ。Brown は一夜の旅を終え、ようやく現実的な意識が司る世界に帰って来るのである。

Goodman Brown は、確かに悪魔の知識という誘惑に自らを譲り渡して平気な、愚かな若者だ。しかし、だからといって彼が悪魔に魂を売り渡そうとするわけではない。彼は、最後まで対立する二極の間に止まる傍観者の主人公なのだ。Faith と悪魔との間にあって、Brown が意志の力で強く一方を選び取ろうとする、または他方を排除しようとする態度は見られない。父親と母親との間でも、どちらかに向かって一歩さえ踏み出すことがない。聖者と罪人の交わりに驚きと不快を感じはしても、清教徒として正義を翳し、これを罰すべきだと断ずるわけではない。Brown に対する教義問答中の人間の墮落——“the total depravity of man”の刷り込みは不十分だ。だから、新婚三ヶ月の妻を残して彼は暗い夜の森に足を踏み入れもする。が、良心の呵責を感じれば Brown は必ず Faith を思う。彼が己の墮落を思う以上に Faith との結婚に喜んでいることも確かなのだ。むしろ、その幸福感から、Brown は夜の森に入り、彼自身の感覚とは異なる17世紀清教主義の世界を体験しようとしている感さえある。彼は決して18世紀的な合理主義の人ではないが、厳格なピューリタンでもない。*The Scarlet Letter* の Hester がそうであるように、¹⁹⁾彼は19世紀的な感覚を持って17世紀に臨む主人公だと言えるのではないか。だとすれば、当然、彼は17世紀という社会背景にあっては、Hester 同様に呪われた存在である。魔女集会の幻視は清教徒の悪夢的現実なのだ。²⁰⁾ Brown は一夜の幻視体験によって陰気な疑い深い男になるのだが、彼の不運は、目を覚まして還るところが、夢か現か、ピューリタン社会という現実であることだ。その世界で、安息日には教会に赴きながら会衆が歌う賛美歌を Brown は聞いていることができない。聖書に片手を置く牧師の熱弁を聞くうちにも、彼は真青になって教会の屋根が音を立てて崩れ落ちる幻を視る。Brown は、かつて信じていたものに疑いを向けるようになるのである。夜中に目覚めると、Faith の懐からも身を引き離す。それでも Faith との間に数多くの子供を設ける。ピューリタン社会が信仰と不信の間を揺れて己の墮落を省みない Brown を許すことはない。彼の葬儀には隣人から孫たちまでもが集まり、その亡骸には Faith が付き添うのだけれども、だれも彼の墓石に希望の持てる碑文を刻みはしない。言い換えれば、ピューリタン社会が Brown に“damnation”という烙印を押すのである。しかし事實は、一定の主義信条を奉じる社会が幻を視ているのだとも言える。夢か現か、一夜の旅に出る Brown は無知な若者ではあっても楽天的で、本質的には決して陰気なわけではないのだから。Hawthorne が Brown を有罪とするわけではないのだ。²¹⁾

Young Goodman Brown は極めて感覚的に己の意識と無意識の狭間を旅する主人公

だ。彼は18世紀のボストンに Robin としての意識を得て目を覚ます、あるいはボストンへの旅の途中で眠り込み、運命の悪戯に見舞われる。David Swan²²⁾に迫るのは、財産を継がせようとする商人夫婦だったり、彼の寝顔に見惚れる乙女だったり、あるいは、彼が目目を覚ませば殺すことも辞さない盗賊だったりする。幸いなことに David Swan が目を覚ますことはなく、実際には何事もない。いや、彼が目目を覚ます時、幸運にも馬車が通りかかる。彼は馬車に乗って意気揚々とボストンを目指すことになる。現実とは、人が偶々目覚めるところ、そこに在ると想われるものに過ぎないことを Hawthorne は暗示する。それは、人間の運命に関わる問題でもある。

アメリカ作家の多くが夢体験を描いて、意識と現実の問題に取り組み、人がどんな朝に覚醒し得るかを問い直して来た。意識は現を捉えはする。が、実存的なりアリティは心の内にあって、その衝動を意識に制御できるかどうかは疑問なのだが、そこに悪魔がいれば、信仰もまた、そこに求めることができるのだ。

注

- 1) Tor Norretranders, 柴田裕之訳, 『ユーザーイリュージョン——意識という幻想』, (東京: 紀伊国屋書店, 2002). Thomas Nagel への言及を参照 (pp. 317-318).
- 2) Nathaniel Hawthorne, “Young Goodman Brown,” *Mosses from an Old Manse*, The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne, Volume X. Eds. Roy Harvey Pearce, et al., (Columbus: Ohio State Univ. Press, 1962-). 90ページからの引用。テキストからの引用はすべてこの版による。以下、引用の際は引用文末尾のカッコ内にページ数のみを記す。
- 3) William Empson, *Seven Types of Ambiguity*, (New York: New Directions Publishing Corporation, 1966). 112, 133ページを参照。
- 4) Ed. Agnes Donohue, *A Case Book on the Hawthorne Question*, (New York: Thomas Y. Crowell Company, 1963). 208ページを参照。
- 5) D. M. Armstrong and Norman Malcolm, 黒崎宏訳, 『意識と因果性——心の本性をめぐる論争——』, (東京: 産業図書, 1986). 悟性が獲得した観念について、悟性が用いられる時に、我々の内部に生じる我々自身の心の働きに関する知覚をロックは「反省」と呼び、カントは「内部感覚」と呼ぶ。内部感覚によって心は自らを、あるいは自らの内的状態を直感する。なお、カントが「外部感覚」と呼ぶものはロックの「感覚」に相当する。196-197ページを参照。
- 6) Rita K. Gollin, *Nathaniel Hawthorne and The Truth of Dreams*, (Louisiana State Univ. Press, 1979). 116-117ページを参照。
- 7) Henri Ey, *La Conscience*, 大橋博司訳, 『意識』, (東京: みすず書房, 1969).
- 8) Hyatt H. Waggoner, *Hawthorne: A Critical Study*, (Cambridge Massachusetts: The Belknap Press of Harvard Univ. Press, 3rd printing, 1971). Waggoner says, “. . . most important of all is his lifelong insistence that the kind of truth he wanted to portray was the ‘truth of the human heart,’ and that the best way to portray this is the strategy of indirection. (p. 251)
- 9) Tor Norretranders, アメリカの神経生理学者, Benjamin Libet への言及から。禁圧は不

快な、あるいは不都合な観念や情動を意識から締め出そうとする精神作用だが、抑圧が無意識的なプロセスであるのに対し、禁圧は意識的なプロセスで、禁圧された内容は前意識にとどまるため、比較的容易に意識化されると言う。298, 305ページを参照。

- 10) Nathaniel Hawthorne, “Egotism; or, The Bosom-Serpent” (1843), 「胸中の蛇」というイメージは Hawthorne 文学の核心を突く比喻だと言える。
- 11) Tor Norretranders, 「私」と「自分」の関係への言及から。社会生活は意識的に作られた契約によって取り決められているが、人はたいてい無意識のうちに活動するので、意識によって結ばれた契約に無意識を従わせることができるかどうかの問題だと筆者は言う。「私」は「自分」の中にある社会的な側面を代表するにすぎない。意識は「私」を支配下に置いてはいるが、何か行動を起こすに際して「私」は総体としての「自分」を動かさなくてはならない。331ページを参照。
- 12) Tor Norretranders, 305ページからの引用。
- 13) Nathaniel Hawthorne, “Wakefield” (1837)。Wakefield も妻を残して旅に出る主人公である。彼は隣通りのアパートに暮らし、20年を経てようやく妻のもとに帰ることをする。Wakefield は現実的な意識とは別の次元で妻を見続けようとする登場人物なのである。
- 14) 信頼の置けない意識が信じる現実（リアリティ）というテーマは、たとえば Cameron Crowe の *Vanilla Sky* (2001) に見ることができる。これは、Alejandro Amenabar による *Open Your Eyes* (2000) のリメイクだが、使われる言語と結末を除けばほとんど同じ内容の映画である。目を覚ませば、ベッドの横には見知らぬ女がいて、身に覚えのない現実がある。夢と現実との区別が明らかでなければ、歴史的な視点など無意味である。かつてあったはずの現実が今に連続性を持たないのだから、どんな世界に目覚めたとしても不思議はないのだ。しかし、人間の感覚的な体験は無意識に記憶され、蓄積される。Richard Kelly の *Donnie Darko* (2001) や David Lynch の作品にも同じ主題がある。David Lynch は *Lost Highway* (1997) や *Mulholland Drive* (2001) では物語の半ばで大胆に登場人物を入れ替え、意識と現実のずれをあからさまに表現する。少し遡れば、Philip K. Dick の “We Can Remember It for You Wholesale” が、人間の記憶を人工的に書き換えることが可能な世界を描く。これは Paul Verhoeven が *Total Recall* (1990) というタイトルでコミカルに仕立て上げている。Bruce Joel Rubin 脚本, Adrian Lyne 監督の *Jacob’s Ladder* (1990) も夢と現実を区別しない。そんな区別に実存的な意味を見ない姿勢がある。ヴェトナムで死んでいく一兵卒の悪夢をシリアスに描くものだが、己の死という現実を前に、己の実存を再評価しようとする回想もしくは懺悔における告白の不確かさや錯覚を映像化して、Ambrose Bierce の “An Occurrence at Owl Creek Bridge” や、E. Hemingway の “The Snows of Kilimanjaro” に重なる内面世界を、もう一つの現実を描くものだ。Stanley Kubrick の *Eyes Wide Shut* (1998) は、特に “Young Goodman Brown” に重なる意識と現実の問題を中心に据えている。Philip Dick や Paul Auster の作品群については言うまでもなく、David Lynch も含めて、意識と現実というテーマの下に、Hawthorne 的な “spectral evidence” を取り上げる映像表現が見受けられる。
- 15) Paul Williams, 小川隆, 今野裕一訳, 『フィリップ・K・ディックの世界』, (東京: ペヨトル工房, 1991)。原題は *Philip K. Dick: Only Apparently Real* で、邦題には「消える現実」という副題が添えられている。「意識と現実」, 「正気という曖昧さ」, 「精神の崩壊」, 「自分の周りがある世界が現実ではないという感覚」などは、Philip K. Dick が抱えたテーマであり、“Young Goodman Brown” との親近性は明らかである。
- 16) Hale, John K., “The Serpentine Staff in ‘Young Goodman Brown.’” *Nathaniel Hawthorne Review* 19 (Fall 1993)。17-18ページを参照。悪魔は Goody Cloyse に振れた杖を与えるが、Brown には楓の杖を与える。Hale は楓の杖に「弱さ」と「内なる腐敗」を

読み取っている。

- 17) Nathaniel Hawthorne, “Roger Malvin’s Burial” (1832). 主人公の Reuben Borne は、二者択一を拒否する登場人物である。瀕死の状態にある義理の父を、荒野に置き去りにして一人許婚のもとに帰るなど、そんな選択を彼は自らに許すことができない。しかし結果的には、必ず助けに戻るという誓いを立てて出立するのだ。義理の父を助けに戻ることなど不可能だと知りながら。ここでは、人間のジレンマと自由意志というものの頼りなさを読み取ることができるのではないか。
- 18) Easterly, Joan Elizabeth, “Lachrymal Imagery in Hawthorne’s ‘Young Goodman Brown.’” *Studies in Short Fiction* 28 (Summer 1991): 339-343. 参照。
- 19) *The Scarlet Letter* (1850) は1642年に始まる物語で、ピューリタン社会を描く作品である。ここに Hawthorne は17世紀的精神を代表する牧師の Arthur Dimmesdale, 18世紀的な科学者・医師として登場する Roger Chillingworth, そして19世紀的な自由思想を胸の内に秘める主人公の Hester Prynne を配している。
- 20) セイレムの魔女裁判が Hawthorne の念頭にあることは確かである。他人を魔女として誹謗中傷する際、当人にはアリバイがあっても第三者が「あの人の悪霊が悪を働くのを見た」と断定すれば誰でも魔女にすることができたのだ。その状況は、「インディアン」の虐殺が始まった19世紀のアメリカに重なる部分がある。19世紀アメリカ白人の多くは「インディアン」を悪魔的な存在として見ることで殺戮を正当化し、彼らの持っていた物を奪った。事実、19世紀の間に「インディアン」が居を構えた土地のほとんどが失われる。“Young Goodman Brown”における悪魔の説教は、そうした行為に及んでなお、自分たちが善良な人間であり、神の恩寵を授かることが出来ると信じるアメリカ白人に対する、Hawthorne が突きつけた皮肉だと考えることも可能かもしれない。
- 21) Arlin Turner, *Nathaniel Hawthorne: A Biography*, (New York: Oxford Univ. Press, 1980). “... He [James Freeman Clarke] said ... I know no other thinker or writer who had so much sympathy with the dark shadow, that shadow which the theologian calls sin, as our friend. He [Nathaniel Hawthorne] seemed to be the friend of all sinners, in his writings. He felt his way through the dark passages always to draw love over them, never to censure. . . .” (pp. 392-93)
- 22) Nathaniel Hawthorne, “David Swan” (1837)